『山路の露』の小君と右近

―空蝉物語・玉鬘物語との関わり―

小川陽子

はじめに

中世王朝物語と呼ばれる作品群の特色のひとつに、先行の作品を摂取し、変奏するという方法が挙げられる。中でも『源氏物語』の影響は大きく、個々の作品研究においても、『源氏』取りの様相を具体的に検証し、各物語の達成や独自性を読み取ることが積み重ねられてきた。そもそも『源氏』自体からして、内なる『源氏』取りあるいは物語内引用などと呼ばれるように、先行する巻々の物語を後続の巻に取り込み変奏することが行われており、物語の創作において『源氏』取りは、きわめて重要な問題であったと言える。

『山路の露』の場合、続編として書かれた物語の性格上、時間・空間・人物などの基本設定をそっくり『源氏』から承けており、他の中世王朝物語と同列には論じがたい。しかし、そのような性格であるからこそ、『源氏』への拘りもまた並々ならぬものであることが容易に推察される。本稿では、『山路の露』がいかにして『源氏』を取り込んでいるか、特に基本設定以外の部分、いわゆる『源氏』正編を摂取している点について、小君と右近という脇役二人の造型を中心に検討を試みる。宇治十帖においてすでになされていた内なる『源氏』取りを『山路の露』が読み取り、さらにそれを変奏して物語展開に活かしていることを明らかにしていきたい。

一　物語の始発―空蝉物語の想起―

『山路の露』は物語冒頭、序の部分において、

これは、かの光源氏の御末の薫大将と聞こえし御あたりのことなれば、その続きめいたるこそ、いとかたはらいたう、つつましけれど、ゆめゆめさには侍らず。ただ、かの小野の里人に、たづねあひたりしありさま、こなたかなたの御気色、くはしう見ける人の、夢のやうなる御仲の、あはれに忍びがたくおぼえ

けるままに、何となく、筆のすさみに書き置き侍る（二六二頁）[1]

と語り、薫と「かの小野の里人」すなわち浮舟の再会なったことをまず明かしている。さらりと語られているが、『源氏』の続きを期待する読者にとって非常に重大な情報である。夢浮橋巻は、薫の使いを拒む浮舟、他の男性の影を疑いつつ憂愁に沈む薫の姿をもって閉じられており、さまざまにその後を推測させるものであった。薫はこれで諦めてしまうのか、浮舟は俗世との関わりを断ち切れるのか、あるいは匂宮が浮舟生存を知って動き出すことはないのか、等々。そこへ『山路の露』は、薫と浮舟が再会した、と冒頭から明確に語るのである。これにより、物語の始まりからすでに読み手の関心は、いかにして二人が再会したか、再会後の二人はどうなったか、という点にしぼられると言ってよいだろう。

そしてこの序に続いて具体的な物語が語り起こされる、まさにその始発の一文は、次のようなものであった。

かの、はかなかりし蜻蛉の行く方、ほのかに聞きつけ給ひてし後は、「いかなりしことぞ」と、御心にかからぬ折なくて、ありしせうとの童をば、その後も度々遣はしき。[2]（二六二頁）

浮舟が「かのはかなかりし蜻蛉」と呼ばれ、薫の使者として小君が遣わされていることがわかる。ここでの「蜻蛉」という浮舟の呼称は、宇治十帖はもちろんのこと、『山路の露』においても他に見えない特殊な例である。『山路の露』において呼称は物語を構成するにあたっての一つの意図的な方法であると思しく、[3]あえてこの一箇所のみ浮舟を「蜻蛉」と呼ぶことに注意しておきたい。この呼称は『源氏』蜻蛉巻末の薫詠に由来すると見て間違いないだろう。

あやしうつらかりける契りどもを、つくづくと思ひつづけながめたまふ夕暮、蜻蛉のものはかなげに飛びちがふを、

「ありと見て手にはとられず見ればまた行く方もしらず消えしかげろふ

あるかなきかの」と、例の、独りごちたまふとかや。

（蜻蛉⑥二七五）[4]

「ものはかなげに飛びちがふ」蜻蛉を見て宇治の三姉妹に思いをはせた歌である。そしてこの傍点部については今西祐一郎氏が、次の二首との表現の類似を指摘されている。[5]

そのはらやふせ屋におふるははきぎのありとはみえてあはぬきみかな（『新古今集』巻一一・九九七。『古今和歌六帖』にもあり）

数ならぬ伏屋に生ふる名のうさにあるにもあらず消ゆる帚木

（帚木①一一二）

今西氏はここから空蟬と宇治の女たちの「中の品」の女であることの共通性を論じられたのであるが、さらに浮舟に限って言えば、「ものはかなさ」あるいは「行く方もしらず」男性のもとから消えてしまうという点において、次の空蟬巻末の二首とも関わりはしないだろうか。

空蟬の身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな
空蟬の羽におく露の木がくれてしのびしのびにぬるる袖かな
（空蟬①一二九）

巻名だけでなく空蟬その人の呼び名の由来ともなった和歌である。「人殻」（＝薄衣）だけを残し光源氏のもとを去ったはかない女性の象徴として「空蟬」の語が用いられている。

そして浮舟はと言えば、自身が入水前に、

からをだにうき世の中にとどめずはいづこをはかと君もうらみむ
（浮舟⑥一九四）

と詠み、入水後の世界においても、

内にも、泣く声々のみして、乳母なるべし、「あが君や、いづ方にかおはしましぬる。帰りたまへ。むなしき骸をだに見たてまつらぬが、かひなく悲しくもあるかな。」（蜻蛉⑥二〇五）

「亡くなりたまへる人とても、骸を置きてもてあつかふこそ世の常なれ、世づかぬけしきにて日ごろも経ば、さらに隠れあらじ。」（蜻蛉⑥二一〇）

かかる人どもの言ひ思ふことだにつつましきを、まして、ものの聞こえ隠れなき世の中に、大将殿わたりに、骸もなく亡せたまへりと聞こしめさば、かならず思ほし疑ふこともあらむを（蜻蛉⑥二一三）

と繰り返されるように、「骸（殻）」すらも残さず煙のもとを去ったのであった。そのはかなさこそが「蜻蛉」に喩えられるのである。〈「殻」を残してはかなく去った空蟬〉から〈「骸（殻）」も残さずはかなく去った蜻蛉〉へ。喩えられる対象が「空蟬」と「蜻蛉」という、どちらもはかない虫であるところも共通している。この点において、宇治十帖の浮舟はやはり空蟬の変奏として造型されたと考えられるのである。二人ともに尼姿となって、残した男性からの働きかけを受けるという、それぞれのその後の物語もまたこの変奏の一端と言えようか。主題性という点において空蟬と浮舟が共通してくるのは手習巻以降であるが[6]、それよりも早く、浮舟・蜻蛉巻においてすでにその予兆は示されていたと見るべきであろう。

空蟬は先述の和歌以後、物語においても、

さて、かの空蟬のあさましくつれなきを、この世の人には違ひて思すに、おいらかならましかば、心苦しき過ちにてもやみぬべきを、いとねたく負けてやみなんを、心にかからぬをりなし。（夕顔①一四四）

かの空蟬を、もののをりをりには、ねたう思し出づ。（末摘花①二六六）

かの空蟬の、うちとけたりし宵の側目には、いとわろかりし容貌ざまなれど、もてなしに隠されて口惜しうはあらざりきかし、（略）とものをりごとには思し出づ。（末摘花①二九七）

のように「かの空蟬」と呼ばれ、光源氏によって折々に思い返され

る。これに対し浮舟が宇治十帖において「蜻蛉」と呼ばれることはない。しかし『山路の露』は空蟬から浮舟への変奏を読み取り、「はかなかりし蜻蛉」のことが「御心にかからぬ折な」き男性が女性の「せうとの童」である〈小君〉を「度々遣は」す、という三者の様相を物語のはじめに配置したと考えられるのである。まさに空蟬と光源氏と小君の関係が再現されていると言ってよい。その始発には、「蜻蛉」という呼称による浮舟と空蟬との二重写しがあった。薫と浮舟の再会を語る物語が、空蟬物語を強く想起させつつ始動している点に注意を払っておきたい。

二　『山路の露』における小君の役割

その後も物語は空蟬と浮舟との連関を示唆しつつ展開する。『山路の露』における小君の動きには空蟬の弟小君を髣髴とさせる描写が散見されるのである。たとえば小野に向かい浮舟と対面した場面。

「あらざりけるさまにも聞こえなしてよ」と、のたまへば、「いと難し」と思へり。「ただ、かく憂きさまにても、母君に今一度会ひ見奉らんと思ふ。これを忍びて伝へてよ」とて、几帳のそばより文を取り出でて、さし置き給へば、ふところに引き入れて、「ありつる御返りなくては、いかにのたまはせん。ただ一くだりにても賜はりて、帰り侍らん」と言へば（二七一頁）

傍線部A「あらざりけるさま」人違いであったと薫に伝えよと言う浮舟に対し、B小君は薫への返事を催促する。これは、すでに原岡文子氏に指摘のある[7]ように、空蟬と小君との対面において、

またの日、小君召したれば、参るとて、御返り乞ふ。「かかる御文見るべき人もなしと聞こえよ」とのたまへば、うち笑みて、「違ふべくものたまはざりしものを、いかがさは申さむ」と言ふに、心やましく、残りなくのたまはせ知らせてけると思ふにつらきこと限りなし。（帚木①一〇七）

b小君が光源氏への返事を催促するも、a空蟬はこんな手紙を受け取るべき人はいないと源氏に伝えよと言う場面と関わりがあろう。

また、薫を手引きし小野へと向かう場面。

暮れぬれば、いみじう忍びやつしたる女車のさまにておはすべし。山道になりてぞ御馬には乗り移り給ひける。夕霧たちこめて、道いとたどたどしけれども、深き心をしるべにて、急ぎわたり給ふ（二七六頁）

傍線部のように、薫とそれを案内する小君の道程が、

夕やみは道たどたどし月待ちてかへれわがせこそのまにもみん（『古今和歌六帖』第一・三七一）

を引きつつ描かれる。そして空蟬巻においても、光源氏を小君の車に乗せ空蟬のもとへこっそりと手引きする道程が、

幼き心地に、いかならんをりと待ちわたるに、紀伊守国に下りなどして、女どちのどやかなる夕闇の道たどたどしげなる紛れ

に、わが車にて率てたてまつる。　（空蟬①一一八）

と、同じく「夕闇は…」歌を引歌として描かれているのであった。日向福氏が「案内するのは相手の女性の弟で名も同じ小君、男が訪ねて行くのを相手が知らずにいるという設定も似ている。人物の行動、その背景など、『源氏』に擬して書き表しているという感じがする」[8]と述べられているとおりである。

小君は、要所要所で空蟬の小君を重ね合わせつつ動いていく。それは〈浮舟―小君―薫〉という三者に〈空蟬―小君―光源氏〉の関係を重ね合わせながら物語が進行しているのだとも言える。この問題について原岡氏は次のように述べられている。[9]

確かに最終的になお結ばれぬままに物語は終るものの「ながらへてあるにもあらぬうつつをばただそのままの夢になしてよ」の歌をはじめ、浮舟は薫と四回贈答を交している。「つかずはなれず」[10]の空蟬源氏型の関係への移行と、空蟬小君像の導入は相関するものと言えよう。

空蟬小君像の導入をこの物語の方向性に関わる一方法として論じられている点、首肯され、多大なる示唆を得た。しかし、確かに『源氏』において空蟬と光源氏は「つかずはなれず」の関係が続くのであるが、最終的に出家した空蟬は光源氏によって二条東院へと引き取られる。はかなく去った女性は結局のところ尼姿となり男性のもとへと戻るのである。もちろんそれは尼という点において、もはや男性の手の届くところではない。しかし、尼となった後、

「松が浦島を遥かに思ひてぞやみぬべかりける。昔より心憂かりける御契りかな。さすがにかばかりの睦びは、絶ゆまじかりけるよ」などのたまふ。尼君もものあはれなるけはひにて、「かかる方に頼みきこえさするしもなむ、浅くはあらず思ひたまへ知られはべりける」と聞こゆ。　（初音③一五六）

と、互いに浅からぬ契りととらえている点は注意される。

これに対し『山路の露』は、はかなく去った女性がすでに尼姿となって物語の始発に置かれた上、二人が再会したことも明示されている。それをふまえての「蜻蛉」呼称と小君の登場であり、そこから思い起こされるのは、空蟬と光源氏の場合のように、すでに尼となっている浮舟が再会後は薫の庇護下へと移り、浅からぬ二人の契りが確認される、という物語の可能性ではないだろうか。すなわち、薫による浮舟引き取りこそが、物語始発における〈浮舟―小君―薫〉と〈空蟬―小君―光源氏〉の重ね合わせによって示唆されたものではなかったかと思うのである。

とは言え、『源氏』においては、いかにして空蟬が光源氏と再会し二条東院へと引き取られたのか、その経緯が語られていない。それに対し『山路の露』はあくまで浮舟と薫のその後を描くことに主眼が置かれているのであり、読み手の関心もまたそこにある。再会への経緯、再会後の二人の遣り取りにこそ、『山路の露』の本領が

発揮されると言えよう。結論から述べるならば、『山路の露』はそこにも小君を深く関与させていると考えられるのである。

小野へ派遣された小君は、少しずつ空蟬の小君と異なる様相を見せはじめる。夙に指摘されているように[11]、空蟬の小君の特徴のひとつに、実際には十二、三歳であったにも関わらず〈幼さ〉が強調されるという点が挙げられる。たとえば次のごとくである。

召し入れて、いとなつかしく語らひたまふ。童心地にいとめでたくうれしと思ふ。（帚木①一〇六）

かかることこそはとほの心得るも思ひの外なれど、幼心地に深くしもたどらず、御文をもて来たれば、女、あさましきに涙も出できぬ。（帚木①一〇六）

そしてこの小君の幼さは、光源氏と空蟬の再会不首尾にもつながっているように読める。

君は、いかにたばかりなさむと、まだ幼きをうしろめたく待ち臥したまへるに、不用なるよしを聞こゆれば、あさましくめづらかなりける心のほどを、「身もいと恥づかしくこそなりぬれ」と、いといとほしき御気色なり。（帚木①一一一）

小君を遣わした光源氏は、その幼さゆえに「うしろめたく」思いながら待っていると、「不用」すなわち不首尾の報告がもたらされるのである。

これに対し『山路の露』の小君は、

「かう聞き奉りし折、やがても聞こえまほしうおぼえしを、大将殿『しばしは人に漏らすな』と、返すがへすのたまひしかば、え聞こえ侍らぬ」など、幼げに言ひ居たり。（二七一頁）

と浮舟の前でこそ「幼げ」な様子を見せるが[12]、薫への対応となると一転、その〈幼さ〉は姿を消す。

「急ぎ参るべくのたまひつるに、いかが泊りは侍るべき。月の光にも道たどたどしかるまじくなん」とて、立つを、「さも、およすげて」と、うつくしみあへり。（二七二頁）

夜が更けたことを心配する尼君たちから宿泊を勧められるものの、破線部のように、薫が急ぐように言ったから、という理由によってそれを断る。その姿は「およすげ」た様すなわち〈大人〉として賞賛されるのである。あるいはその直後、帰京した場面でも、

夜中うち過ぐる程に参り着きたれば、御門もみな鎖されにけり。「今宵は、さらば、出でなん」と思へども、『いづくへ行きたりけるぞ』など、尋ねられんも、むつかし。この御ことづてに、『かく』など聞こえてこそ母君にも言はめ」と、らうらうじき心にて（二七二頁）

薫邸の施錠を知った小君は、今宵は退出しようかと思うものの、思案の末、小野での次第をまず薫に報告しようと決める。浮舟からは母への伝言を頼まれたにも関わらず薫を優先する、その判断が「らうらうじき心」として思慮深さを評価されることとなるのである。

そしてこのような小君のあり方によって、事態は薫にとって好ましい方向へと動いていく。

かの童召し寄せたり。「昨夜は、更くるまでこそ待ちしか。いつ程にものしつるぞ」とのたまへば、「ありつるまぎれに参りつる」と聞こゆ。「いかにぞ。例の同じいぶせさならんと思ふこそ、かひなけれ」とのたまふにも、「さしもあらぬさまに聞こえなしてよ」とて、まことに憂しと思ひ給へりつる人の御面影、あはれに心苦しう思ひ出でられて、しばしためらはるれば、「つひに隠れなからんものゆゑ、こと違ひてはあしかりなん」と思ひて、ありつるさま、こまかに聞こゆ。（二七四頁）

破線部アいつもと同じさえない報告を予想し「かひなけれ」と嘆く薫に対し、イ小君は、結局はわかることなのだからと詳細に浮舟の様子を報告するのである。これは空蟬の小君が、

君、召しよせて、「昨日待ち暮らししを。なほあひ思ふまじきなめり」と怨じたまへば、顔うち赤めてゐたり。「いづら」とのたまふに、しかじかと申すに、「言ふかひなのことや。あさましし」とて、またも賜へり。（帚木①一〇八）

と「言ふかひな」き働きぶりを怨じられたのとは対照的である。そもそもこの場面自体、女のもとに弟小君を遣いにやる→小君を召し寄せる（Ｃｃ）→昨夜待っていたのにと詰る（Ｄｄ）、という設定および表現の対応からして帚木巻を意識していると見てよいだろう。ここでの小君の対応が、帚木巻ではｅ顔を赤らめるという〈幼さ〉を示すばかりであったのが、『山路の露』ではＥ実は昨夜の火事騒動の際に帰宅していたことを告げる、という差異をもって描かれる。先に見たように小君が思案の末に退出せず薫への報告を優先したことがこのＥの対応につながるのであり、〈大人びた〉小君の思慮の結果として、〈幼さ〉を強調される空蟬の小君との差異が生み出されていると言ってよいだろう。

さらには小野訪問に際し、浮舟の心中を思いやりつつも薫に従う様子が描かれ、到着後もまた、

まづ、かの童を入れて案内見給へば、「こなたの門だつ方は鎖して侍るめり。竹の垣しわたしたる所に、通ふ道の侍るめり。ただ入らせ給へ。人影もし侍らず」と聞こゆれば、「しばし、音なくてを」とのたまひて、我ひとり入り給ふ。（二七六頁）

のようにまずは小君が様子見に遣わされ、しっかりと報告することによって、薫が浮舟のもとへと向かうことも可能となっている。空蟬の小君がことごとく光源氏の手引きに失敗したのとは対照的である。小君が〈大人びた〉様相・対応を示すことによって薫と浮舟との再会を実現する様は、まるで空蟬の小君との差異こそが『山路の露』の物語展開を推し進めているように読める。

ところが二人の再会後、途端に小君は〈幼さ〉を強調されるようになる。

「筑波山（＝浮舟母）は、いかに思ひ惑はん。あまり心をさめざらん程、いともの騒がしからん。この子（＝小君）は、いと奥なからぬさましたれど、なほもろともに行きて、ことのやうくはしく言ひ散らすまじう、口固めてぞよかるべき。（略）」とのたまふ。　（二八九頁）

「奥なからぬさましたれど、」軽率な様子ではないけれど、と断りは入るものの、右近が一緒に行って口止めしろと薫は言う。小君一人では心もとないという意思表示と見てよいだろう。その後も小君は、

「こまかなる御ことの心は、この小君こそ聞こえ給はめ」と言へば、「いでや、あこの言ふらんことは、はかばかしからじ」と言はれて、うちほほ笑みて、「をこがまし」と思へる気色にて　（二九一頁）

はじめよりのことども、幼けれども、言ふかひなからず語りなせば、いみじう悲しくて、さしつどひつつ、せきかねたり。　（二九一頁）

「まろは、かの殿の、あだにもののたまふことだになければ、ましてさばかりもの思したるなん、まだ見奉らざりつる。（略）」など、幼き心にまかせて言へば、「さて、さて」と、さすがにうち笑まれながら　（二九三頁）

と〈幼さ〉が頻りに強調される。そして、小野へ浮舟母と右近を案内した後、物語から姿を消す。母および右近と浮舟の対面における小君の様子は語られず、これ以降、薫の使者も小君以外に任される。あれほどの働きぶりを示していたにも関わらず、小君は何の役割も与えられなくなるのである。

このように見てくると、〈大人びた〉小君は、あくまで薫を浮舟のもとへと導くために必要とされたことが明らかであろう。物語の冒頭以来、小君によって空蟬物語を髣髴とさせその再現を示唆してきた物語が、ここに来て、空蟬とは異なるということを宣言したかのようである。

その転機は明らかに浮舟と薫の再会にある。小君によって導かれた薫はその胸中を訴え、「かばかり世離れたらぬ所に移ろはせ聞こえん」（二八三頁）と小野からの引き取りを望むのであるが、浮舟は受け入れない。これにより小君は存在意義を失ってしまうのである。ここまで空蟬と重ね合わされ少しずつずらされながら展開してきたがゆえに、尼姿となっても男性に引き取られない浮舟、引き取られることで二人の「契り」を確認することを拒む浮舟の姿はより強調されると言えよう。

三　右近の登場――玉鬘物語の想起――

そして小君の退場と対応するように、入れ替わりに物語に登場するのが右近である。浮舟の乳母子である右近は、手習巻以降、浮舟に回想されるものの直接には物語に登場せず、『山路の露』に至っ

ても、物語前半まったくその存在に触れられることがない。ところが、薫と浮舟が再会するも引き取りを拒まれ、浮舟母へ手紙を渡すことになった途端、

かの右近と言ひしは、侍従なども程なく后の宮に参りてければ、なほ嘆き惚れつつ、あやしき所に隠ろへてありけるを、聞き給ひて、あはれと思しつつ、「心ざまなどもおとなおとなしく、よかりしものを」と見置き給ひければ、忍びて参るべくのたまはせて、衣などつかはしたれば、いみじうよろこびて参りけるを、もてなし・ありさま、もとよりまじらひ馴れたる人々にもこよなからねば、君（＝薫）もめやすしと思しけり。かの夕顔の右近は、「煙を雲」とのたまひし御さしいらへだにも、心もとなげなりしを、これはいと若やかにて、憎からぬさまして、さやうの方もつきなからずぞあめる。（二八七頁）

と、「かの右近」として物語に呼び込まれ、実はすでに薫が邸に引き取り、古参の女房たちにも劣らぬ存在として「めやすし」と高評価を得ていることが語られる。そしてここで目を引くのが傍線部「かの夕顔の右近」と明記された一文である。右近を登場させるにあたり、物語はわざわざ夕顔の乳母子である右近を引き合いに出すのである。[13] ここで引用されているのは次の一節である。

空のうち曇りて、風冷やかなるに、いといたくながめたまひて、

見し人の煙を雲とながむれば夕の空もむつましきかな

と、独りごちたまへど、えさし答へも聞こえず。かやうにておはせましかばと思ふにも胸ふたがりておぼゆ。（夕顔①一八九）

夕顔の右近が、夕顔を失った光源氏の独詠に対し「えさし答へも聞こえず」にいる様子が描かれている。『山路の露』は、この右近と比較することによって浮舟の右近の性格付けを行うのである。「さやうの方」すなわち和歌もそれなりに詠めるということであり、「めやす」き存在として、主人に対して当意即妙に和歌の受け答えもできるという評価と読めよう。[14] とは言えこの後、物語において右近の和歌的才能が特筆されるわけではない。小野で浮舟と贈答を交わすが、そこでも取りたてて和歌のすばらしさあるいは受け答えの機知は述べられない。とすれば当該場面においては、あくまで「夕顔の右近」を思い浮かべることが求められているのだと考えられよう。

『源氏』において、夕顔の右近は、夕顔の死に直面したのち、光源氏に引き取られ、紫の上付きの女房となる。

右近は、何の人数ならねど、なほその形見と見たまひて、らうたきものに思したれば、古人の数に仕うまつり馴れたり。

（玉鬘③八七）

昔からの女房並みの存在となったことが語られており、『山路の露』における右近の待遇もこれに通じるものと解せよう。さらに右近はその後、夕顔の遺児玉鬘を発見し光源氏のもとへ導くという重大な役割を果たす。「夕顔の右近」という名前の挿入からは、『源氏』に

おける夕顔物語と玉鬘物語の二つが連想されるといえよう。

とりわけこの場面では、すでに右近が薫邸におり、問題の一文において夕顔亡きあとの右近が引き合いに出されていること、さらに、〈女性（＝浮舟）を手元に引き取ることを望む男性（＝薫）〉という物語の構図になっていることを考え合わせると、ここでより強く影を落とすのは玉鬘物語であろう。

そして玉鬘もまた、先の空蟬と同様に、宇治十帖において浮舟の造型に深く関わりを持つ女性であった。山田利博氏は初瀬と石山という二つの観音を基軸として考察を加えられ、「玉鬘物語を発展的に把え直したものが浮舟物語である」と指摘されている。[15] また松田豊子氏は育った地や周囲の人物との関わりなどから二人の対照性と共通性を論じられ、[16] その他にも二人の類似と物語の発展性についてはさまざま論じられている。『源氏』浮舟物語の構築において玉鬘が影響していることは間違いないと言ってよいだろう。

『山路の露』において右近が「夕顔の右近」に重ね合わされ比較されたとき、同時に読み手は浮舟に玉鬘を重ね合わせることになる。それが可能となるのは、すでに宇治十帖において浮舟が玉鬘と密に関わっていたからに他ならない。もちろん『山路の露』が独自に浮舟を『源氏』の登場人物に重ね合わせ、変奏していくことも可能であったはずである。しかし『山路の露』は、あくまで『源氏』における物語の方法を読み取った上で、それに寄り添い、続編としての物語を組み立てていく。それが『山路の露』の『源氏』に対する姿勢であり、物語構築の一方法であったと言えよう。

四　『山路の露』における右近の役割

では、右近と浮舟を玉鬘物語に重ね合わせることで連想される物語とは、どういうものであろうか。先にも触れたように、夕顔の右近は、玉鬘を発見し光源氏のもとへ導くという重要な役割を果たす。光源氏を基軸として物語を見た場合、言わば〈女性を手元に引き取る男性〉という物語の構図は先に見た空蟬物語と同様であるが、玉鬘が空蟬と大きく異なるのは、その引き取りに際して右近という女房の存在が鍵となっている点である。

ひるがえって『山路の露』は、物語前半において、空蟬物語を重ね合わせながら展開することで薫による浮舟の引き取りを示唆しつつ、一転、再会するも引き取りを拒まれるという状況を描いた。もはや薫では説得できないとなった時、すなわち空蟬物語と展開を異にすることを示した時、それまでの物語牽引役とも言える小君が退場、入れ替わりに右近が登場するのである。この段階での右近の登場と「かの夕顔の右近」との比較、それに伴う玉鬘物語の想起は、右近を媒介として浮舟を薫のもとへと引き取るという、次なる物語の可能性を示唆するものとしてとらえられるのではないだろうか。

新たに登場した右近は、まさに玉鬘物語を再現するかのような動

きを見せる。浮舟入水時の様子を問う薫との長い遣り取り（二八八～二八九頁）は、蜻蛉巻において薫が事情を右近に尋ねた場面（蜻蛉⑥二三〇～二三五）を想起させると同時に、夕顔亡きあとの光源氏と夕顔の右近との遣り取り（夕顔①一八三～一八九）をも思い起こさせる。その光源氏と右近の遣り取りの最後に配されたのが、先述の「見し人の煙を雲と…」詠とそれに答えぬ右近の姿であった。

あるいは右近が浮舟母のもとを訪れる場面。

やがて車ひき入れさせつつ、急ぎ乗りて出づれば、（略）玉の台の目移し、いとど品々しからぬ心地して、守（＝常陸守）もここに居たる程なりけり。（二八九頁）

「玉の台」のような薫の邸に比べて気品に劣ると感じる右近の心情であるが、これは玉鬘との邂逅を報告するため六条院に参上した夕顔の右近の、

右近は大殿に参りぬ。このことをかすめ聞こゆるついでもやとて急ぐなりけり。御門引き入るるより、けはひことに広々として、まかで参りする車多くまよふ。数ならで立ち出づるも、まばゆき心地する玉の台なり。（玉鬘③一一八）

という心情を反転させたものと解せる。

そして、浮舟と玉鬘とを結ぶもっとも重要な鍵である初瀬もまた、右近によって『山路の露』に呼び込まれる。

されども、近き程にも侍らざなり。いづくとなくて、にはかに這ひ隠れさせ給はば、守もさだめてたづね聞こえ給はんずらん。今日明日、思しのどめて、例の、初瀬詣でなど作りなし給ひて、明後日ばかりにおはしまさなんは、よかるべき（二九二頁）

浮舟母の小野訪問を可能にするための口実として右近は「初瀬詣で」を提案するのである。もちろん『源氏』においてすでに浮舟およびその周辺人物と初瀬が分かちがたい関係にあり、それを踏まえての提案であることは間違いない。[17] しかしここで、あえて〈右近〉の口から初瀬が持ち出されたことにより、〈初瀬における女性と右近の再会→男性による引き取り〉という玉鬘物語が改めて重ね合わされ、初瀬の代わりに赴いた小野――初瀬に見立てられた場――での再会とその後の薫による引き取り、という物語の可能性が強く意識されると言えよう。

加えて、この訪問における浮舟説得の最初の担い手が、浮舟母でなく右近であったことは注意される。

かの宮の御ことも語り出でて、「いみじう人目見苦しきまで思し嘆くめりしに、程経れば、例の、御すきごとども聞こえ給ふさへこそ、あはれに侍れ。かの殿の、たとしへなくのどかに、ぬるきやうに見え給ひしかども、忘るる世なくあはれに思し入りつつ、右近などまで尋ね数まへ給ふも、その御ゆかりと思しためるこそ、かたじけなく見奉り侍れ。（略）げにこそあは

れに見奉り侍りぬれ」など、語り聞こゆれば（二九九頁）

右近は破線部「かの宮」匂宮と実線部「かの殿」薫とを比較し、ひたすら薫を賛美する。薫による引き取りを直接に語るわけではないが、すでに薫本人からその意思を訴えられた浮舟にとっては、薫の思いを受け入れることを促すものに他ならない。これは、玉鬘巻、初瀬において右近が光源氏を称揚したことと関わっていよう。

（乳母ガ）「（略）父大臣（＝頭中将）に聞こしめされ、数まへられたまふべきたばかり思し構へよ」と言ふ。恥づかしう思いて、背後向きたまへり。（右近ガ）「（略）（光源氏ガ）『我いかで尋ねきこえむと思ふを、聞き出でたてまつりたらば』となむのたまはする」と言へば、（乳母ハ）「大臣の君（＝光源氏）は、めでたくおはしますとも、さるやむごとなき妻どもおはしますなり、まづ実の親とおはする大臣（＝頭中将）にを知らせたてまつりたまへ」など言ふに、（右近ハ）ありしさまなど語り出でて、「（光源氏ハ夕顔ヲ）世に忘れがたく悲しきことになむ思して、『かの御かはりに見たてまつらむ、子も少なきがさうざうしきに、わが子を尋ね出でたると人には知らせて』と、その昔よりのたまふなり。（略）」などうち語らひつつ、日一日、昔物語、念誦などしつつ。（玉鬘③一一五）

玉鬘の乳母が破線部のようにあくまで実父頭中将による引き取りを望むのに対し、右近は実線部のようにひたすら光源氏を称え、そちらに引き取られることの正当性を語るのである。状況が異なるため表現レベルでの一致は見出しがたいが、〈右近〉が初瀬と見立てられた再会の場（＝小野）において他の男性と比較しつつ優位性を語る、という点において、当該場面もまた玉鬘物語を意識したものと見てよいだろう。玉鬘物語の再現を念頭に置きつつ展開するからこそ、まず浮舟母ではなく右近が説得にあたるのである。

しかし、その物語の可能性は他ならぬ浮舟本人によって断ち切られる。右近の訴えを聞いた浮舟は、「現心の色濃さは、さこそ」と薫の思いの深さを理解するものの、そこから深まっていくのは、

「人をば何か憂しと思ひ聞こえん。身のあはあはしく、さすらふべき契りにてこそ、さる乱れもありけめ」と思ふには、ただ遁れがたき身の憂さぞ、世々の報いも口惜しく思ひ知られ給ひける。（三〇〇頁）

のように我が身の「契り」への思いであり、「ただ逃れがたき身の憂さ」を「世々の報ひ」と痛感するのである。

そして、もはや玉鬘物語の再現すなわち右近を媒介とした薫による引き取りが不可能となったとき、最後の手段として浮舟母が説得にあたる。

「道の程、はるけさも、同じ世に侍れば、おぼつかなからぬ所へ、いかでわたし侍らん。昔、かの時々隠ろへ給へりし、あやしの宿はおぼえ給ふや。所はいと広く侍れば、さりぬべきさま

につくろはせなして、わたし聞こえんと思ひ侍るを、大将殿のいみじう忍ぶべくのたまへば、それもいかがと憚られ侍るも、などか人の知るべき、忍びてこそはと思ひ給ふる」など、泣く泣く聞こゆ。（三〇一頁）

大将殿（＝薫）が人に知られないようにと言うのが憚られはするが、どうして他人が知ろうか、こっそりと私が引き取ろう、と母は涙ながらに説得する。ここに至り、もはや薫は必要とされず、むしろ浮舟引き取りの障壁のように語られるのである。ここまで空蟬・玉鬘を重ね合わせることで薫による引き取りが示唆されてきただけに、薫の無力さ、拒否する浮舟の姿が際立つと言ってよいだろう。

おわりに

『山路の露』は小君・右近という脇役二人によって『源氏』を重ね合わせつつ、新たな物語を切り開いていった。すでに宇治十帖においてなされていた空蟬・玉鬘から浮舟への変奏を的確に読み取り、利用したのである。それは、小君と右近の登場・退場の仕方、さらに宇治十帖において侍従や浮舟乳母といった他の脇役たちが存した中あえてこの二人のみをクローズアップして取り込んでいる点を考え合わせれば、きわめて意図的なものであったと思しい。

『源氏』を読み終えた時、読み手は自由にその後を想像する。読み手の数だけその後の展開もまた存在するのである。それが個々の思いにとどまらず、具体的な物語という形をもって表れたのが、いわゆる中世王朝物語の類であるとも言える。もちろんすべての物語の淵源が『源氏』であるというわけではないが、多くの物語にとって、『源氏』――さらに限定して言えば浮舟物語とその結末――が創作に向かわせるひとつの原動力となったことは確かであろう。

その中にあって、薫によって浮舟が引き取られる、という物語展開の可能性を追い、そんな展開は不可能である、と語ってみせたのが『山路の露』ではなかっただろうか。確かに夢浮橋巻において二人が対話することはなく、浮舟は母への思いに揺らぎつつも小野にとどまった。しかし、たとえ薫が浮舟と再会し、直接間接に思いを訴えたとしても、浮舟が小野を離れることはないということを、物語という形をもって主張したのである。それは、『源氏』の結末における浮舟と薫のあり方を再確認する物語であるとも解せる。[18] その物語を展開するにあたって、『源氏』宇治十帖における正編との重ね合わせ・変奏を読み取り、脇役の造型に意を用いた点に、『山路の露』の特色が見いだせるのである。

注

(1)『山路の露』の引用は、稲賀敬二氏校訂・訳注「中世王朝物語全集」（平16・笠間書院）により、引用箇所の頁数を引用末尾の（　）内に記す。引用に際し、傍線・囲み等は私に付した。以下、同じ。

(2) 二類本は「ありしせうとの童をば、その後も度々遣はしき」を欠く。

(3) 小川（岡）「『山路の露』における浮舟の呼称表現―『源氏物語』続編としての物語の方法―」（『古代中世国文学』第20号　平16・1）

(4) 『源氏物語』の引用は、「新編日本古典文学全集」により、引用個所の所在を、引用末尾の（　）内に、巻名・テキストの巻数（①～⑥）・頁数の順に記す。和歌の引用は『新編国歌大観』による。以下、同じ。

(5) 今西祐一郎氏「『宇治十帖』管見」（『国語と国文学』第61巻11号〈昭59・11〉、のち『源氏物語覚書』〈平10・岩波書店〉所収）

(6) 山田利博氏「拒否する女性・空蟬―その造型と第三部への発展性―」（『中古文学論攷』第四号〈昭58・12〉、のち『源氏物語の構造研究』〈平16・新典社〉所収）

(7) 原岡文子氏「山路の露物語」（『体系　物語文学史』第五巻　平3・有精堂）

(8) 日向福氏「『山路の露』の引歌について」（『相模国文』第12号　昭60・3）

(9) 原岡氏前掲注（7）論文。

(10) 池田節子氏「山路の露」（『研究資料日本古典文学①物語文学』昭58・明治書院）

(11) 吉海直人氏「『源氏物語』「小君」攷―童と継子譚の視点から―」（『國學院雑誌』第97巻第5号〈平8・5〉、のち『源氏物語の新考察―人物と表現の虚実―』〈平15・おうふう〉所収）、吉井美弥子氏「源氏物語のふたりの小君」（『源氏物語の思惟と表現』平9・新典社）。なお、吉井氏は「「小君」という少年が登場し、薫と浮舟の「媒」となるということが、光源氏と空蟬の場合と二重写しになるとき、その後の展開まで予想させられることになる」と指摘された上で、「山路の露」にも目を向けられ、「たとえば、薫が小君を浮舟のもとにその後もたびたび遣わす、という設定をした「山路の露」は、まさにそうした〈読み〉の一展開例と言えるのではないか」と述べられている。

(12) 西木忠一・池田良子氏は、この場面における小君の幼さを「幼くていまだ十分な使者としての役目を果たせない」ものの「一心に役目に徹しようとするけなげな姿」と解され、「作者には「女性」を想定するのがより妥当であり、かつ、弟を持つ女性（姉）であるといえそうに思われる」と作者像に結びつけられた（「山路の露注釈（三）」『樟蔭国文学』第32号〈平7・3〉）。しかし小君に関する一連の描写はやはり空蟬の小君像との対比の上でとらえ、作者と切り離して考えるべきであろうと考える。

(13) 『源氏』において〈右近〉という女房が夕顔関連と宇治十帖に登場することについては、稲賀敬二氏「夕顔の右近と宇治十帖の右近―作者の構想と読者の想像力―」（『源氏物語の世界　方法と構造の諸相』平13・風間書房）に指摘がある。

(14) なお、引用されている夕顔巻の一節は、現代では「源氏はひとり胸中の悲傷を詠誦したのであり、源氏と対等の立場にない右近は、返歌をせず、彼の独詠歌の鑑賞者にみずからとどまる」（「新編日本古典文学全集」頭注〈平6・小学館〉）のように解され、右近の〈心もとなさ〉の表出とはとらえられていない。しかし『山路の露』はあくまで右近の過失と読んでいるからこそ当該場面のような比較表現に結びつくのであり、作者の『源氏』理解の一端がうかがえて興味深い。

(15) 山田利博氏「『源氏物語』における初瀬と石山―玉鬘物語と浮舟物語をめぐって―」（『国文学研究』第87集〈昭60・10〉、のち前掲注（6）書所収）

(16) 松田豊子氏「源語東国の表現映像―玉鬘の西国と浮舟の常陸―」（『源氏物語の探究』第13輯　昭63・風間書房）

(17) 宇治十帖における浮舟および周辺人物と初瀬の関わり、『山路の露』への継承と利用については、小川（岡）「『山路の露』二類本独自本文の生成とその性格」（『中古文学』第71号　平15・5）で論じている。

(18)『山路の露』が『源氏』における浮舟・薫それぞれのあり方をどう解していたか、またそれをどのようにして『山路の露』という新たな物語に位置付けていったか、といった問題については、稿を改めて論じたい。

[付記]

本稿は、平成17年度広島大学国語国文学会春季研究集会（平成17年6月26日　於広島大学学士会館レセプションホール）における口頭発表を改題、加筆修正したものである。席上貴重なご教示を賜りました位藤邦生先生、妹尾好信先生、井上新子先生に厚く御礼申し上げます。

―おがわ・ようこ、広島大学大学院博士課程後期修了―